武江披砂

下

和書門
類 二七八七二
號
函 八
架 一
冊 三

內閣文庫
和書
類 二七八七二
號
冊 三
函 七四
架 六

內閣文庫
番號 和 27872
冊數 3 (3)
函號 174 96

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

武江披沙卷之五

城西

山の手

南畝子著

弘前醫官澁江氏蔵書記

明治十六年購求

新編東都集云

江戸山の手いとゆかしき月の出を八月十五夜

武蔵国八景

月のけて山のはをゆく雨雲の紫色なる

江戸名所八景

神田橋

[illegible]

小石川

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吉祥寺橋　今の水道橋

[illegible]

四谷御殿

[illegible]

御殿山[illegible]

牛込

小系家多[illegible]

牛込大胡[illegible]　牛込藏　南向[illegible]

坂光[illegible]

[illegible]

市谷田町の藩士[illegible]四谷[illegible]上[illegible]の[illegible]水
[illegible]川[illegible]山藩の[illegible]を[illegible]高[illegible]城[illegible]と
市谷左内坂[illegible]の[illegible]右[illegible]左[illegible]と[illegible]
角田左内名友直字ゟ詠の墓なし

市谷八幡

第一番戸田[illegible]

市谷八幡者元八月[illegible]清[illegible]し天[illegible]
[illegible]の[illegible]結構[illegible]ゟ[illegible]の男[illegible]

山の[illegible]の[illegible]こと[illegible]の[illegible]男[illegible]を[illegible]
[illegible]千[illegible]
[illegible]

吉良義央墓

牛込[illegible]昌[illegible]ゟ[illegible]の[illegible]

元禄十五壬午十二月十五日

靈鷹寺殿実山相公大居士

従四位上右近衛権少将前上野介源義央朝臣

桃川如燕墓　以下刻ス

享保八酉

鎌倉円覚院空山古水居士

八十七才

牛天神　南谷谷志ス　牛天神ヲ物語ル人

神社ヲ[illegible]ル人ヲ[illegible]ヲ[illegible]ル

玉川上水ノ水ハ四谷門前ヲ流ル

石碑ヲ

玉川上水自四谷水門至赤坂石桝　桝俗字訓マスカタ

石垣石蓋之御普請大工柏木三右衛門　田茂左衛門

延宝六年戊午八月廿三日

鞠町天神

社内ノ扁額ハ[illegible]作ル彫刻ノ工人破

笠ヲ如ケルヲ[illegible]ノ火災ニ焼失

西念寺　四谷仲町所

長家[illegible]ル[illegible]四谷仲町ノ[illegible]

西念寺ニ[illegible]ル[illegible]ノ[illegible]

七夕梅ハ一名七夕梅とも年毎に花おくれて咲ゆゑ
かくはいふ西念寺のまへにあり梅の外に今も八
重ハ梅なれど樹ハ一旦二種の花を継ける寺のまへの
ありけり　西念寺ハ若松町にありて樹ハ枯つけ侍しといへり　あまたあまたある
雪火場あり

白賁墅

昆谷明にあり　南畝先生続縁之翁の別荘
なり　雅ハ橘洲を画く傍ハ海の筆と傳稱の

唐衣ハ夜鶴ハ號ス様橘洲と自ら書ける扇
號あり　豳風七月の詩を篆字にて竹簡に書つけ
諏訪庵の在ける所より南門に扇號を
南畝翁への詩を誂へり　四編に出

目白

目白坂浄樹山新長　浄土宗
新長谷寺御殿あり松平家の寺細し

一ツ木原 [illegible]の一ツ木

小田系記ニ大永四年二月十二日上杉の家臣
吉田源六郎源三郎源次郎と
引合おのおのを[illegible]別所割を出移小系
新左衛門武蔵伊豆おのおの[illegible]
江戸の城に[illegible]中[illegible]
[illegible]
[illegible]

永享記ニ 平河天神

長禄元年管領廣感院殿年十四歳ニテキハ
ヒケルガ太田入道ニ命シテ武州河越ノ南仙
波城ヲ今ノ河越三芳野郡ニ移シ要害ノ縄
張畢テ即城ヲ築ケリ北方此城ノ鎮守三芳
野大政威德天神ノ宮居マシマス是ノ三芳野
天神ト申ハ何ノ御代ヨリ御遷跡アリテ如何
ナル美感ノ故ヤラン御神体ハ銅ノ五本骨ノ

扇ヲ収メ奉ル御宝前ノ厳飾ニモ皆扇ヲ
繪ニ書タリ神秘ノ事ハ不知尼扇ハ風ヲ靡
カシ炎蒸ヲ去ナレハ如何サマ此城ヨリ美場
也北院中院トテ三十余ケ寺並甍タリカヽル
砌ニ立ラレタル城ナレハ勇々敷カリシ事尼
ナリ或記云文明年中道灌江戸城ニモ何越
ノ如クニ仙波ノ山王ヲ城ノ鎮守ニ崇メ三芳
野天神ヲ平河ヘ移シ玉フ

古碧山龍厳寺鐘銘

武蔵州豊島郡青山縣原宿村有一古刹山扁
古碧寺号龍厳東都城外西距一里餘
東照大神公未入都城之先已有此寺封疆若
干官免税租不知誰某之草創里民以為墳寺
數惟欝攸之災共具傳里老之口碑所載大概
如斯矣慶長年間有喚室應公者主此寺纔守
一宇茅廬尓後相継主席寺務就漸今之住

持青山木公来此以降不忍上漏下濕之患水
蘚寒葅黐衣縞食頻起興復之志其地西南
貍多断崖如懸郎自負簀荷鍤運石搬石以為
平地日去月来奉佛之殿安奥之室及門廡書
閣之屬悉一新之其縄界標木一如大伽藍之
制吁其一臂之功實力不少矣于茲有檀度未
野氏照者足利左武衛源義敏之四男中書令
寛元七代之裔也有事故翻晦于都下者年
尚矣嘗思善縁研精佛事一日来告曰此寺之
経営雖畧備未有鐘鼓之設我補之缺典廼
命嶋氏鋳洪鐘而不日桂之樓上其蓋欲詰
現當二世之勝縁也畧
元禄第十一歳舎戊寅八月如意珠日
前南禅金地比丘雲叟元云撰
住持沙門南禅前第一座青山碩木
施主未野八郎左衛門尉源氏照

治工
田中丹波大掾藤原重行

庭ニ圓座松アリ
又木牌アリ左ノ通記ス
松月栄樹躰

東都砥川住
庭達師　釋一峰　作

相生庭
南紀伊住
庭師　佐々木庭和

寛政二年庚戌ノ比ヨリ築ス假山十ヲ

外川地蔵　穂田ニ有リ

第六天　渋谷川ノ邊ニ有

古松アリ農家アリ嘉吉ト云

熊野社　松平安藝守殿別荘アリ農家有

チ是ヲ守ル林中ニ大石アリ湧泉アリ次ニ記ス

慈雲山長泉寺

門前ニ石碑アリ不許葷酒入山門裏ニ

武州豊島郡江戸庄渋谷村慈雲山長泉寺者

同郡同庄貝塚青松寺末享保十五庚戌歳五

月十有五日現住秀仙寛綴建焉

鐘銘

武州豊島郡江戸縣渋谷郷慈雲山長泉禅寺

傳閑本朝八十二帝後堀河院文治年中開闢

古刹也農未詳何系既洞水分流禪燈續焰而
未幾乎一百六十余歲也乃以青松七世瑞翁
驚禪師為始祖雖然年月永遠而堂宇壞弊境
逼于民家將絶亡矣越青松十四世不中的和
尚自捨衣資以復舊墓且加慮旁正成道林敬
烏中興第二祖自爾並于江左之序席規模漸
備矣境隔塵寰不容車馬之喧寺前流水潺湲
帶迴寺後陰林鬱密展周平田于湏坐參普岸
之禪玄杉萬株卧聳寒山之聽又有一序大悲
閣蓋雲慶之雕甞倣各金玉丸之所歸敬崇奉
也至于今居民有事必禱于此灵應之著無感
而不格去年復創之後予遽然謂夫觀音大士
者耳根圓通之教主而以音声界為入三摩地
門此寺之可有而不可不者其惟鐘乎於茲泛
墓檀緣求費於衆助鑄鬼鐘一口徑二尺懸焉
仰酬慈力伏幄慈心嗚呼此鐘也雖稟質金石

都是信心之陶冶以警晨昏以代筭漏其功豈
可不記乎矣因為之銘銘曰地接江左山隔武
城長泉杳杳慈雲霞横華鐘新鑄禪模大成
稟塵外質凝土中精鳴音昧行劉流喬客化情
花前呼月兩度唱晴周性在我惠無比声
于時貞享三龍次丙寅年九月十八日武州豊
島郡渋谷上郷慈雲山長泉禪寺現住元海不
乾謹誌

治工　中村氏範之

渋谷郷長泉寺観音菩薩記

予每嘆古祠旧刹赫々乎古而爽々乎今者不
知其數甚者侂遺跡殘墨失之神威之灵仏力
之著無人知焉惟傳之于村老野夫之口碑僅
焉存其什一終至眞偽混淆疑信相半教人懷
望洋之嘆若夫搜尚索隱拾其遺事余緒載之
書冊以供好奇之需作志之資則恐免墜落於
萬一雖千歳之後其歴々猶今日然是非大手

巨筆則不易為如予才鈍文拙者非能所當惟
畜之于懷而空為憤懣而已于隅陪于国大夫
人之駕至長弟寺登大悲岡飽得特菩薩真像
端嚴妙麗無比非今之作因問之僧家曰此渡
谷金王丸所帰仰常懐之馳驅于風塵干戈之
中未嘗離其身相傳定朝所做通身常温如人
肌膚名之曰人肌觀音威灵尤神俱興廢之事
来歴之詳以真經年之久不可得而知焉後問

之鄉父老考之遺録以得其梗槩所謂金王丸
者川崎土佐守基家胤也基家以軍功領此地
叡建巨刹時康平六年也至金王丸始母此像
後至寿久二年金王將討田子先生發兵先攻
大藏館殺小山田二郎直逞陣城下先生夜卒
逞兵私襲金王營々中士卒夢中驚起不知所
為獨金王按大刀疾叫大戰一以當百然與寡
不敵始已很唄忽有一卒鐵衣非常操弓射敵

一箭倒数十人先生大驚卒以敗績金王多真
功急召之忽鳥不見金王大怪以為神助因見
菩薩像汗流遍体金王倍以帰仰其感応之妙
實有如此大永四年正月十三日北条氏綱与
上杉朝興相戰于高輪此時巨刹為兵火被被
焼色砕不存獲此像依然毫髮不損瑞然獨立
于余火殘焰之中村老翁見以為神私持帰家
安之梁上不虔其家地上夜震梁同大老翁大

寄當作奇

驚謂凡俗家不宜安此灵仏因搆一小芳堂于
路傍安之一日　大樹家光公使鷹至此同此
寄跡以為神終附以地今所謂長泉寺是也是
等之事同之古老考之殘記實所有而不知者
疑以不信豈非所謂疑信相半者哉近者藝州
大守搆別莊與此地隣患其無水教掘井工穿
之卒不得會得之奥濁而不適用大守大夫人
常信浮屠聞薩陀之灵教管事人詣指蓍卜地

一拓即得因就其地穿之則清泉湧出其高三
四尺杳耳冷冽水旱不嘗增減是今人所親聞
親見也此佗応扣度音隨念有感不可枚挙焉
嗚呼英雄猛烈如金玉者幾人自金玉時至今
其間相遥亦幾歳此像為其人所信而至今之
人不絶者如有私維持而不失者在然終寄蹟
於古梵宮裏知而信者村老野夫之外寥々乎
寡有聞焉其間與廢盛衰之蹤與慈悲感応之
絶無知之者此予所以深嘆且慨収拾其遺支
傳之千後也宝永三年次丙戌九月十八日武
陵藤村弥一右衛門満茂再拝謹記

維時享保十有七龍舍壬子九月

長泉六世天産誌之

右観音堂ノ額ニ見ル堂ヲ瀧見堂ト云額アリ
寺僧ニ問フニ答テ云ハ寺モトハ丹後守殿稲葉丹後
守ナルヘシ今下ヤシキアリ下屋敷ニアリ其地ニ瀑布アリ故

瀧見堂ト云其後此地ニ移リテ堺布ナシト云
文中ノ清泉ハ松平安藝守殿ノ勧請セラレシ
熊野ニアル所ノ湧泉ノ了ナリト云リ右湧泉
ヲ石甃ニ延宝二甲寅年五月十四日湧泉ト
彫付テアリ熊野ノ門ノ扉ナドニ梅体ノ紋ア
ルハ安藝守殿御内室松平加賀守殿ヨリ
嫁シ来レル故ナリト云リ本社ニハ鷹ノ羽ニ
枚重ヲタル紋アリ是安藝守殿ノ紋ナリ

稲荷宮アリ（右ノ鳥居ニ享保十三戊申九月ト見ユ山主ノ持ナリト云ヘリ）
中渋谷ニ大松アリ是古ヘノ海道ナルヘシ本ハ
一本ニテ圍一丈二尺余一同ホト上リテ枝三
ツニワカレテ數丈ノ高ヲ凌ク根ハ蟠リテ節
多シ木ノ下ニ地蔵庚申石像ヲ置ク農夫
ニ問ニ名ナシト云
江戸砂子ニ渋谷ヨリ世田ケ谷ヘ行道ニ道
云物見松有ト記セリ疑フラクハ是ナラシカ

渋谷山東福寺鐘銘

大日本国武蔵国豊島郡渋谷八幡大神社創
干　後冷泉帝之時渋谷旧号谷盛庄親王院
地分七郷渋谷郡其一也初源頼義東征之日
使秩父六郎墓家奉請雄徳山八幡大神
鎮座于茲以前以墓家戦功為最賜氏河崎任
土佐守食邑於谷盛庄因自建別当院寛治五
年源義家重為修治建久二年源頼朝増修

殿堂規摸益宏朗詣社拜謁賜以僧字之三號
後改号山曰渋谷院曰常照寺曰東福天台之
徒掌而居焉墓家之子童家祈此神得生金玉
尤父子氏渋谷故称曰渋谷八幡宮弘麗為一
方之甲距今之江戸東一里余地靈土腴草木
暢茂櫻花之美周于遠近至今為奇觀焉至大
永中一羅兵燹神宮僧宇忽尓焦土荒廢有年
所比至慶長就其故墟僅作小社尓来茸補無

経殆復頽側惠頌本性源氏栗原世甲陽人新
羅義光二十四世之裔也幼而薙染於道有志
元録戊辰年来(ノ)此院不忍坐視勝地曠廢憤
然以興復為己之任不数年宮宇一新略復旧
観皆出於其力而無待于外矣嘗矢境界地漸
狹窄粤慧順懇告宮遂復金玉堂之故址再造
堂安像乃剷荒斫樹周地得于坪余作街置店
以為永業具於勤労功統可謂興廃継絶而垂

裕後昆者也既而斯波玄海語曰巨鐘枕久無
以警晨昏也我力能造焉不日而鬼氏功成洪
音震揚法物全備神灵感民煩晴消功德不
可量哉施主玄海諱氏照未野氏為足利義敏
第四男中書令寛元七世之孫舊故仏乘遍遊
道場脫塵超俗之士也鐘成爲能勞賴藝銘
之遂為之銘曰
親王故渋谷灵場八幡垂跡百代鎮疆乃宮鉾
宇輪奐輝光累世創成一朝淪亡靡克興復曠
歷星霜物皆有教觀既再章堂々神殿耀々佛
堂具孰僝功慧公敢當繼累復初産業具昌巨
鐘高架洪音遠揚煩惱消滅福祉湟洋神感人
樂地久天長
宝永元年歳次甲申仲秋望日
住持第三十七世三部都法大阿闍梨堅者
法印慧順

施主未野八郎左ヶ門尉氏照入道斯波玄海

治工田中丹波大掾藤原重行

福島半左ヶ門尉源長宅筆写之

渋谷八幡宮ノ前ニアル古碑

左ニ

如専所行是菩薩道
梵字五字アリ
漸々修学悉當成仏

奉刻彫四面石塔一基
右意趣者施主数人
累年庚申講之〇奥為
供養造立而以奉祈
現當二世安乗之本懐者也

文明二年庚寅八月吉祥日

法主妙本

五味沃惣兵衛
絃部加兵衛夫婦
行山五郎左ヶ小夫婦
根岸平左ヶ門夫婦
碓水小兵ヶ
国野四郎左ヶ門

高主彦左ヶ門
国野竹之助

津所六右ヶ門
金沢市左ヶ門
恩田加右ヶ門

右ニ

藤寿丸彦左ヶ門
柳沢仁兵ヶ
遠藤卯右ヶ門

右寛政元年四月五日南畝子写

武江披沙卷之六

城南

南畝子著

外櫓田

○新安手簡云

今の内櫓田御門と昔之酒船門とを花

田付汲石の書付より見へ侍る

新橋

○玉露叢

寛文八年の事にて虎御門と桑陽の

間より新規より橋かゝる新橋と云

延享義伝記云新見源兵衛云昔八新橋是ロ

御門かゝ宝永塔出来享保九年正月廿九日夜の間
焼失せり
○林道春南辰紀行に云　愛宕
いつきの時より京かたに愛宕と遠江四かの二所ハ前
後しまより後河出らるゝ所の所ハ又南北四
極して侍り是ハ勝軍地蔵の法を行ふて
こゝに武士の崇敬する所なるわゝ
御所ばかりはかくなる殿よりなり
京洛後迄堅三河州築壇構閣陽山丘誰知帝昂

神封物却作沙門活命謀

○源孝範集木戸三郎左衛門尉の宅にまうでゝ郭公聞はやと
ゝ住侍りけるまゝにかゝりて庭のつゆ
なるみなるゝとを見ぬれまつしくきとをる
にちりきたりなるのこりて侍るをかけあさま
なきこゑまつ山ちかくなるまつ松とそゝ
てなれとも変はらぬのなかめのことをもと
かゝりてやはりとのこちとをたてゝ故人の
うゝ

[illegible]

○林道春丙辰紀行云　増上寺

髣髴給孤園祇廊倒大門遠公名已久義道法猶

存悲願雖扶女哀鳴屡繫猿始知蓮社内更有國

師尊　金入寺時一庭前有懐

○羅山文集林道春卷四十五云

増上寺鶴香爐銘　代太田備中守

奉献増上寺　台徳院殿霊前

丹顱鶴爐玄甲亀跌何萬千歳無量壽軀

寛永十八年正月二十四日　太田備中守資宗

○羅山詩集林道春卷五十八云

板倉待從無周防守源重宗得一奇石于洛涯欲備

台覧事以聞乃使良工鑿開其石貯大相國之水以供

頒濯將附海運以達于江府未至會其薨逝噫見于

澤而憶其親對盤石而念其祖見劍而思徐君觀竟

于墻慕黄帝於鼎皆是其忠愛之心有之乎故

今其石載之欝林之舟以至于此於是使余書其
事因賦一章云尒
石盤盛水氷涓涓盥漱況猶無垢湔忝敬中心堅不
轉清冷一掬献　尊前
寛永七年正月廿四日
○黄葉集　鳥丸権大納言藤原光廣公
台徳院殿御廟の前の不鉢周防守源重宗
朝臣奉りけるかきつけ
うまとかふとものうちのやとをるのかのあるうえ
ゆ
仏は潮干の手水鉢と云ことそ
ある書よいき〳〵
○羅漢石
羅漢像
寛永廿年甲申正月廿四日彫物師吉岡豈前父重継
七十三歳刻之
影向石
寛永拾〇〇吉田豈前守〇〇〇
○檜椿　同御廟の中に有り
諸國株茶記　植村氏はこゆ

○蓋屍云　尾張天野信景

武州飯倉ノ里常照院（今増上寺大門の内）本尊一光三尊乃如来ハみぶ名ん坊　後花園帝　永享元年己酉七月十四日漁士網よりくり上てもやしに安置まいりもせり　後土御門院文明二年庚寅二月十四日常院の信誉関白実冨の答よりて彼如来を寺に移し申く本尊と崇ふ　正親町院天正八年庚辰三月宇田川集一ゝと造りて檀越となり同十四年秋八月紫衣を寺ちの僧碩故信誉光ちゝ弟子

小ちゝ如来同体のゝ光ゝ光ゝ光ゝ光ゝ光ゝ定四の頃琴師に来る琴師も南無阿弥陀の事ゝゝ感涙を流ゝ弟子ゝ帳を開き浮るゝて迷ゝ正徳四年甲午秋ゝ善光寺の常灯の光ゝ清ゝこの光ゝ長明灯と云ふ　ゝ年のあに和尚あれゝゝゝゝゝて門戸ゝ開くゝ弟子もありし故信誉ありん堂を建ん

今茂八月六日ゝ二万日　右遠信の名所絵十四ゝ

冥帳ちりうく生死くんじゅ此度人京市門檀那と彫り
今度海の犯罪を形しいめしき献物おとしてい
すゝ宮殿にて四位の芳像を彫（るとやまさかゝねを
ちりうる

浅布原　首吊塚

慶長見聞記云八月十三日於岐阜表討取首注文

四百三十　福島兎衛門尉手　四百九拾　池田三九衛門手
三百八　浅野九京太夫手　二百五拾　内藤馬守手
二百三十　田中兵部少輔手　二百四拾　堀尾信濃守手

北内百二十桶ニ入江戸ヘ下ス御実検ノ後浅布ノ原ニ
首吊塚ヲ御築成サル　焼香増上寺源誉上人　玉藏院
忠義法印以上三人

○流道　今龍土ト書し
江戸圖鑑　石川流宜俊之　云　流道（りうどう）　百姓町西ニ云
麻布ノ内ナリ
元祿二年　巳巳板也

○猯穴　今此狸穴トカノ
同書云　猯穴　長坂の東　甲府様御屋鋪辺
南留別志云まゝ穴といふ所八古金わりしる穴あり
又ハまぶの事し享保六年の比茶屋地ゝ掘ゆてたれ
ゝ　まゝ穴のたゝぬかりとそわらすあり
○光孝天皇　御陵塔　ほくみ石の燈籠あり

麻布廣尾　天現寺ヨリ寺傳三同ホ未詳

○品川
羅山詩集林道春卷三十五　品川鴨詩
品川亭子掃鐵塵
梅花無盡藏　僧万里卷二
品河　小春二日神奈河詩ノ次ニ　同日隔五十町有江戸城多法華宗
双塔五重兼一層　同宗音菩法華僧
蓮紅二十八差別　子細看　来満口氷
号妙国寺ニ重塔在之

銀葉夷哥集云　品川ゟ〳〵

髪容よき所のれなるに流れゞ与茗荷の女

大和森岡氏頭角

品河観音堂　内縄嶋

永禄十二年ノ比し

小田原記云駿河へ御加勢アリテ小田原ノ人衆ヲ大ナヶ
レハ信玄其際ラウカヒ今度小田原衆ノ思ヒヨラサ
ル方ヨリ碓氷峠ヲ越シテ武蔵国江戸葛西ニカヘリ
人衆ヲ二手ニ分テ小田原ヘ寄ル一手ハ八王子ヨリ町田
カリツクイ瀧山ヲ責ル体ニテ道筋ヲ追補ス一手ハ江
戸ノ城ヲ責ル躰ニテ江戸品河縄嶋アタリヲ焼テ民
屋ヲ追補ス不思議也（松ヶ谷ノ高縄島ヤ）此乱ノ時ニ信玄
之侍竹森ト云者花村ト云者二人品河観音堂ヲ焼本
尊ヲ取テ財宝ノ追補シ甲州ヘ行テ後彼観音仏
罰アタリ大ニ乱氣セシカハ余ノ処ヘ送リシニ同是モ乱氣シ
テモテアツカヒ往来ノ乞食聖ヲ頼ミ品河ヘ返シケル此佛三
年ノ後色ニメ不思議ヲ現シ品河ヘ自ラ可返ヨシタクシ
宣ヒ終ニ品河ヘ返リ給フ誠ニ末世ノ不思議也然レハ御堂
モ焼イツクニ居奉ルヘキ処モナク乱世ノ比誰建立スヘキヤウ

モナシ路ヘ傍ニ乞食法師等仮ノ草堂ヲ作リテ奉ニ安置今モ森ノ辺ノ辻堂見ユルハ此観音ノ事ナルヘシ

○櫻田

小田原記云大道寺ハ普代ノ主ヘ不忠ニテ一戦モ無之事不似合上ニ不芸有トテ江戸櫻田ニ被誅早子二人助リ一人ハ出家成後江戸本泉寺住寺ヨリ成ル但大道寺駿河守ハ氏直御供ニ高野ヘ登リシト云人アリ不審ス此両説如何

○芝

南畝別志云孝標ノ女のかきしるしの中に東路のおもかけ忘れがたしいふかりしの芝かるふや

○冀田

暮景集　太田道灌持資集

小茶を手にあつ入れば四のゆ冀田といふ所の山荘にて

らひ心やすうこそ侍れ〳〵伊達忠宗二階堂盛衰

太夫かてゝ家のあれはてゝ百年の秋を

められしより岸打樹こゝいふことをよこたる

待月花しるあくさもしまこかるゝ春のこゝの四

○目黒

○妻驢　江戸方角あ尺図　延宝板ヨミえり

南蛮別志云平山氏季盤の馬毛目鴉毛とふ名あり

白め黒めあるとふ地名なりめくろと書驢とかくまた

いつれとも目驢とかくるゆえなり目驢目辟目驢皆

名馬の名なれとも世に名つ書なるゆえ記此

よ角うちりの馬と世せるあやや

○辯當山　目黒不動の後の山とふ

○目黒瀧泉寺後の山よりの木敦書字文義の墓石碑の

表ス甘蔗先生墓　碑の左ニ云享保二十年青木敦書蒙命種甘蔗因人呼予曰甘蔗先生甘蔗流傳使天下無餓人是予願也今作壽塚書石曰甘蔗先生墓　碑の右ニ云　君諱敦書字厚甫源姓青木氏號昆陽元禄十一年戊寅五月十日生明和六年己丑十月十二日終壽七十二葬于下目黒村別墅南（若為儒営葬地于此故也）

○一軒茶屋臺　目黒原ニあり俗ニ老父ノ茶屋ト云

○篠崎維章（字子文号東海称金吾）朝野雑記ニ云目黒不動者日本武尊之廟也見東武府志或曰祭橘姫

○黄葉集　鳥丸権大納言藤原光廣公

江戸ヨ上リケル時沃庵和尚の旅歌ヲ多ツヨサリ

ウルワシクウツクシノサクラアリケレ

山里ヨカヘルヤウヲ花ノ春ヲ待ツ

沃菴和尚

同人もとくさめるつゝ花はなほ月望へ〳〵くまなきのまそ

○池上

羅山詩集　林道春　巻六

余往見池上本門寺　誠大伽藍也　近時紀伊君之菅堂
專信日蓮流造立之羅京知恩院江戸増上寺不過之歟
自池上望六郷橋如長堅之曳地如大蛇之摸波余所見宇治
勢多参川之矢矯之屬并此為最大寔壯觀也他後侍
台德大相国御前時言此橋見于池上台顔快然畧

身延の道の記　僧元政

六日池上へまゐりてゐるに上人谷中へ出給ふとゝ法華堂家
ごとにやゞ〳〵はなしきゝぬ　中略　廿日江戸をいでまふ
やつれい一日とゝまる池上へつきてさらに法文をと
たつねくいるゝかけ〳〵なれるやうなる伊豆つ
ゆんきこゝろ　中略　きゝぬ　中略
人世少知音　追師斯再尋　今宵池上月　依舊照天心
その夜〳〵さうくまてもるかの四畳堂をおもひ出つまの風
寒も世間のあり〳〵け蛍のおもんぬ　原秋也　中略　思

へともんのかへるいとたうミしりもて小黒申すありぬいう文
まうおせんにとちられあらんにみうとげちまく土ゐかふ空うち邑
て両おしかりいてたりんしおとぞうの支のおりとめて両を
ひみきれどやがて味ぬれたミ枕くぬきしてれ

小田原記云信玄（永禄十二年比也）ハ品河ノ宮ヲ多河石見守鈴木等ヲ追散シテ六郷ノ橋落ケレハ池上ヘカヽリ池上寺ヲ追捕シ乞此寺ハ不焼北僧ノ案内者トシ矢口ノ渡リヲ舟ニテ渡リ稲毛ノ平間ト云所ヘ渡リ稲毛十六郷ヲ追補ス此時ニヤ江（今ノ金剛寺之新安午筒ニ見ユ 按金剛寺の後鶯谷ノ多福院ト云）戸芳林院ヲ焼本尊佛經ヲ押取李太白ノ墨跡ヲ取

シトカヤ甲州ニテ信玄重宝ト閲ヘシ李太白ノ掛物是シ大円寺ヲ初メトシテ悉ク焼本尊杯経マテウバヒ通リ乞

蓮聖人註画讃（沙門日澄録）云弘安五年壬午九月八日午刻出身延濘宿下山九日大井十日曽祢十一日黒駒十二日河口十三日呉地十四日竹下十五日関本十六日平塚十七日瀬谷十八日武蔵入玉ノ荏原郡千束郷池上村右衛門大夫宗仲ノ屋同廿五日鎌倉ヨリ第子檀那来集講安国論（中略）自十月十三日酉尅向未曽有大漫荼羅北向十二日辰尅誦方便品大衆同音誦之至入佛智覚見道故句（或云壽量品ノ中間）頭北面西右脇而

化御年六十有一大地震動日照読経衆又同誦各設最
後供養入棺十四日戌刻日照日朗勧之荼毗子刻催
次第輿之前陣日朗後陣日照前後各八人相従（具加被）夫釈
尊有霊鷲山講説法華経嘗于昊山良跋提河邊沙羅林入滅
聖人者於身延山読誦法華経嘗于延山良田波河邊池上村帰
寂古今道同悲哉又云然以火葬毗火滅已後收取遺骨（中略）踏遺
命送延山同二十日出池上宿飯田云又云自弘安六年二月聖人之
御昏而特輩悉昏其數一周忌将来可入目録之由催之因茲僧
俗各帯来茶毗池上長榮山本門寺日照筆受合為百四十除軸

○六郷

小田原記云六郷ニ行方淳正居タリ元間已レカ屋鋪近所ナル八幡
要害ニカマヘ稲毛ノ田島横山駒林等引卒シ橋ヲ焼落
甲州衆ヲ不通

○廻國雑記　聖護院道興准后

文明六年十月
芝の浦とゝるゝ所いとゝ
のさひしきに去るきもこゝ
やりぬるゝ夕烟なそゝ
此うゝをるゝ井とゝ

芦まし[illegible]あ[illegible]ふかのうちあひ浮む世へる芦の仁風

○新井宿

小田原記云永正九年小田原勢追カケリ一責ケレハ三浦陸奥守父子新井ノ城ニタテコモル（中略）上杉勢悉敗北セシヲ追廻テ突卧切伏ケルホトニ一返シモ返サス江戸ヲ差テ引テ行三浦篭ル勢共兵粮尽ハテ、北後詰ヲ頼シニ上杉方負不角ケレハコハイカニト仰天ス早雲ハ上杉ヲ押掃ヒ猶新井ノ城ヲ責落シト急ニ責ケレハ（中略）永正十五年七月十日辰ノ刻ニ出テ小田原ノ先陣ヲ二町計追立切ツリ枕ヲ双テ討死ス三浦前陸奥守従四位下平朝臣義同子息弾正少弼従五位下平義意并家親大森越後守佐保田河内守同彦四郎三須三河守以下百餘軍ノ屍ハ巨滝ノ辺ニ散血長城ノ露ニ満サレハ今ニ至ル迄其怨霊共此所ニ留リテ月曇雨暗キ夜ハ叫喚求食ノ声シテ野人村老ノ毛孔ヲ寒クカラシム其後毎年七月十日荒井地ニ亡霊アレテ往来ノ人ノウツニ見ヘ言葉ヲカハスヿ度々也トカヤカソロシナトモヲロカナリ

芝切通時鐘

元和五巳未年長谷川豊前西久保八幡宮社内ニテ草創

時ノ鐘撞堂ニ當所ヘ引ケル時ノ年号延宝二甲寅年ヨリ
當安永四乙未年ニテ年数百二年ニ九只今ノ場所ニテ
西久保冨山町鐘主若松義右衛門再興

一長谷川孝前陰ノ義ハ寛文十戌年五十二年目陰撞刻鐘

一地面浮願ニ成堂上寺外境内元豊上平地十二坪坂下ノ
道幅一間通坂内二十一間之年月不知 [illegible] 公儀ヨリ用外ニ成

一享保九辰年七月冒切通明地永井町ヘ出ル邪往還ヲ坂
口迄巾一間ニ長十二間ハ定杭被打通道ヲ拵下置候

一元祖義右衛門義ハ元来根別大坂ニ近在天王寺ノ願分若松村中
百姓出生ニテ川崎利右衛門中御侍ニ成大養寺門前ニ町ニテ両替
商買致候町名主ニ御呼名ニ若松義右衛門ト改ル陰再

猶中山史

切通町陰ニ
若松義右衛門
死書ニ見ヘタリ

○西窪

東海篠崎征章ノ和学辨云元享釋書ニ武州西窪ノ書ノセルハ當此ノ西ノムガノ事ナル歟

武蔵國豊島郡愛宕山鐘銘

愛阜勝壤靈祠並覺溥摧魔軍偏鎮武城慶長敕構
嗣君大成消磨星霜續仍修營世宗神威日新民生
風波永息鳥亦不驚復降　釣命廻柱礎頂再鑄洪
器草釣莘鯨侵天吹月喚地震崩眠醒一撞夢破五
更傳圓通響止不平鳴忍土解脱殊在音聲厥福無
盡豈萬年榮

旨宝永四年歳次丁亥四月中浣日

別當圓福寺現住沼門義山謹銘

奉行加藤源四郎藤原景利

奉行石川傳太郎源一致

冶工　矢部豊前掾

愛宕下

銀葉夷歌集云江戸愛宕下ノ鐘ハ八幡山宝塔院信海

あいたらぬ
ちりおぢいろこの利生

青山玉窓寺鐘銘

鐘銘并序

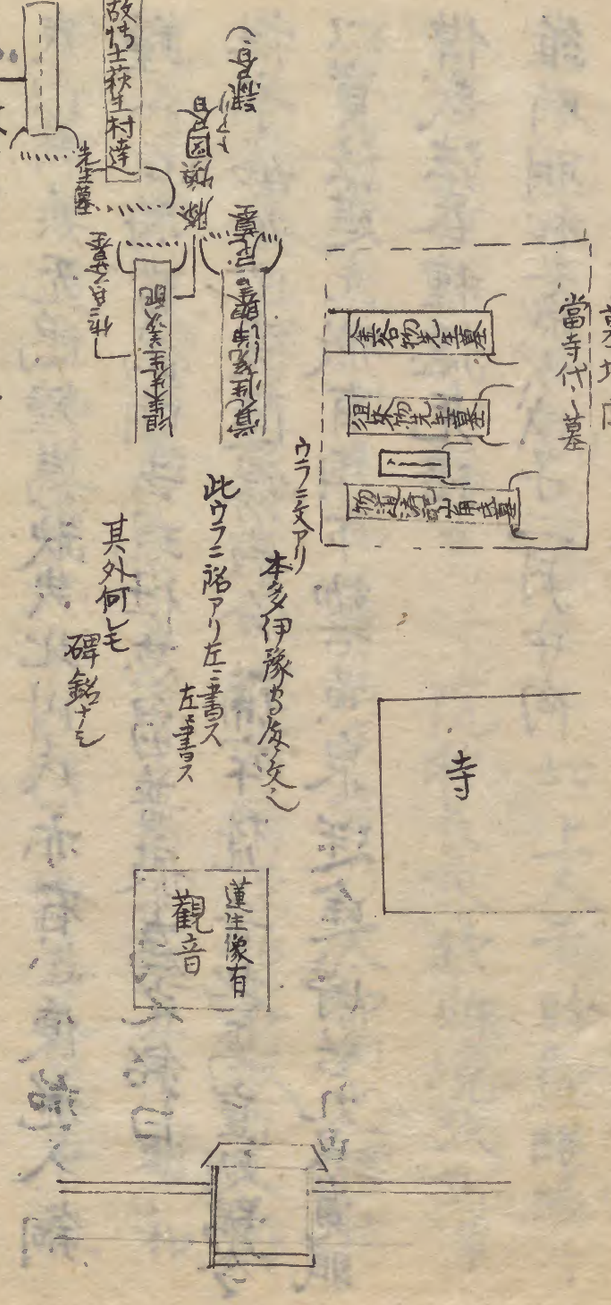
鐘之為法器其來也尚矣佛府舊物法輪所由轉而
祖庭樂器規則所以節蓋萬彙之有體用相依而互
顯物有體無用者天下未之有也体顯用則一器一
具不無功用於鐘鼓也爾以時觸著則發天機以警
寤寐齊靜躁其用於戲偉哉已既非用家具何為駢
馳長物聞聲之悟道皆於是五〻圓通歸一揆故鑄
焉永備玉窓法宝以傳不朽而已 銘曰

宇宙之東有一梵宮巨鐘新鑄巧窮衆工外圜亾偶
中虛有神響應百谷聲蕩訣塵其來施路杵蔑告時
鏗〻無煩坦〻如砥十方破夢一槌灯心玉窓月轉
雲間龍吟
江尤之蘭若崑崙之山主第十宰翁峯州叟謹誌
告宝暦八戊寅年二月吉日

武州荏原郡中自黒高峰山
長泉律院圖 并 鐘銘

增上寺第四十五世 前大僧正成譽玄大和尚夙以
荷法自任嘗有願創一律院程式止作扶護宗放鴻
志未就俄示西歸有高第千如上人者幹蠱繼績乃
移當国古禪利山號高峰院称長泉於斯境改為淨
二宗律院矣北川氏祐善居士者乃大和尚之檀信
率法精懇且深景慕大道德當時経始容殿方丈厨
院等亦所于時宝暦十三癸未之歳也越五年明和
四年丁亥造立佛殿亶於今茲戊子修供養法事社
衆以為其无鳴鐘為缺典北川氏亦有心使施入銅
鐘一口將資函明去現任苾芻普寂為之銘曰
性本如如流変隨縁寂今蒲牢梵音起焉豈翅號令
以資法筵上徹有頂下徹黄泉迷途淳苦九界覺眠
偉哉法器種德无邊
維時明和五歳次戊子二月中旬
武州荏原郡中目黒
長泉現住苾芻普寂識

一芝三因豊岡町長松寺ニ祖来先生墓あり寺ハ海中ニ出ル茶毘観音ハ〜ハ蓮生法師の像あり



覚性院浄譽(　)尼墓ノ碑陰云

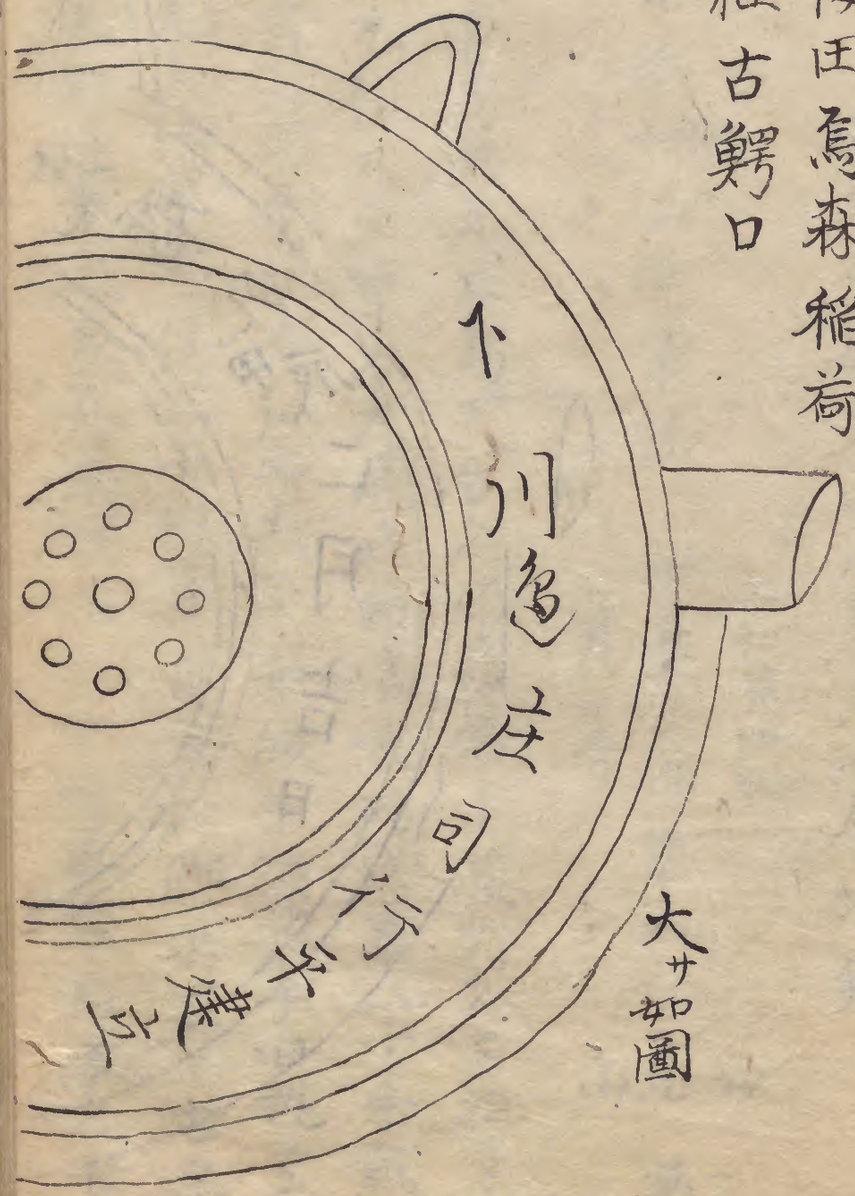
是故士屋戸部侍部臣松本勘兵衛之女水藩播侯臣醫佐ニ立慶之妻也有女帰茂御先死乃養於茂々家十有五年享保丁未四月十三日没以其女塋所在遂葬此寺

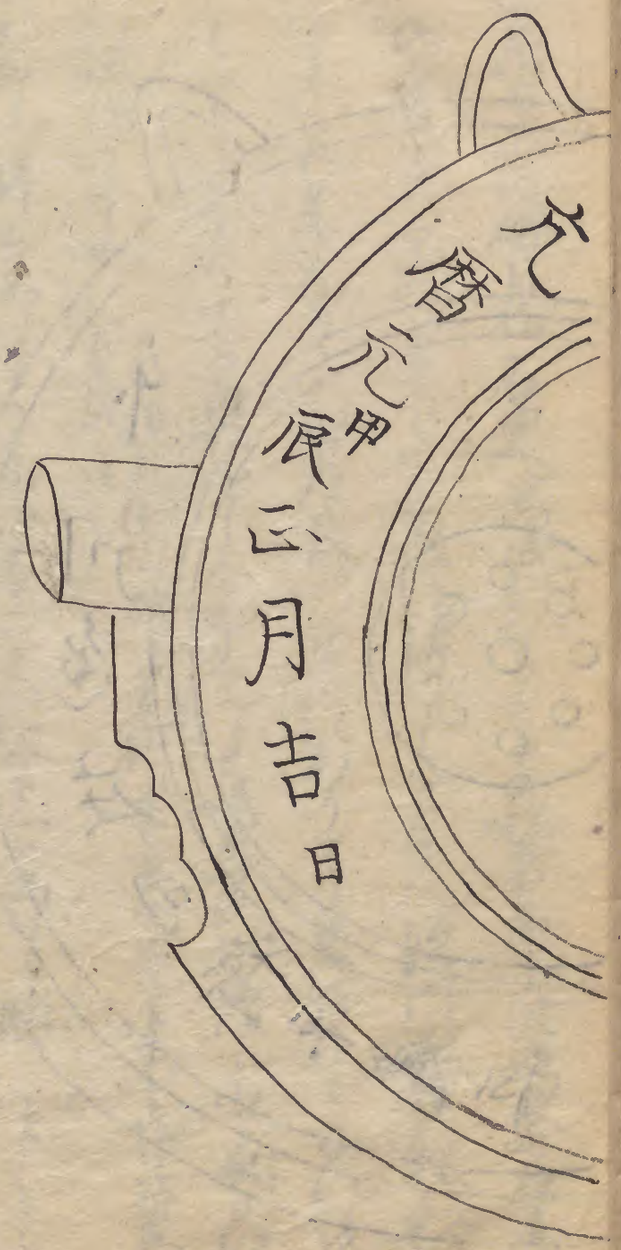
物茂卿識

○飛鳥の碑見れば石面（高低ありて字形定かならざる）嶋高氏発
の書也二字つまりて石化活りしとかん（源川三井親和
ずこの年ありしは何人筆なるかはしらずこれ成
もとしるしまりて字形ちいさく出来しと嶋高氏物語中委敷
道伯ゝる　　額飛鳥山碑八尾別医曲宗純書ト塩谷孫蔵
真筆信し

○碑出来しより年の委こと此金三十両ゝ潤　とゝて
公より召籠（賜もしとかんこれを同人のこと也
山碑ゝハ成島氏　飛鳥山始末に委ノアリ

櫻田鳥森稲荷
社古鰐口





碑文谷　妙光山法華寺七層塔銘

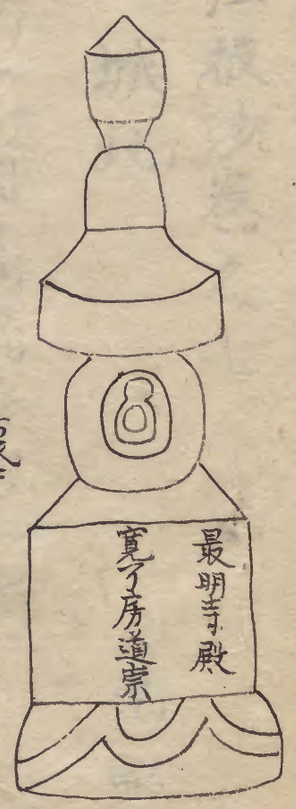
正和弟四年

南無妙法蓮華経　　開基日源聖人　妙一　光覚　山

九月十三日

夫源高師者本為天台之学頭居于駿州之実相寺吾元祖大士重入大藏時即信伏而師事二十余載矣當山元是台流弘安六年亦皈于師改乎旧執号妙光山法華寺住三十四春自正和御示冢之古至寛永御追貢之今凡三百又二十四歳石廟未之有

惜哉御遺骨徒話乎塵土今也門流比丘抽至心誠
或唱滿題名二千部或奉上金銀六八両衆拳殊以
起立此碑報酬恩山德海之高深祈尓元上正覚之
妙果焉挹流知源刻香尋根其此之謂欤伏乞功德
餘香〇法易隨善見聞共期拂惠而已
旹寛永第十三丙子暦秋八月吉日
願主前第十世小比丘日瑞敬白
羌門第中真俗同志勉旃



裏
弘長三癸亥年十月十二日
正五位下行相模守平元師時頼

山ノ上リロニ三塔アリ

山高テ
左　明應ハ
中　逆終正清禪門
明應ハ
右　文禄ハ年甲

武江披沙卷之七

城北

南畝子著

○馬喰町一町目高島屋吉兵衛といへる椀家其
屋敷の内に[illegible]家の[illegible]やけ[illegible]の
棟札に
寛永元年甲申九月上旬大工吉兵
衛小石川餅指町の後家板町と呼ものと[illegible]
仰出[illegible]

十日元鷹匠町ヨリ後ハ川町ヲ唱ヘ申ス
作ル

○神田川

東武実録云元和二年十月是月江城ノ北神
田ノ堀ヲ掘リ土手ヲ築ク安部四郎五郎
正之是ヲ監ス

○柳営日記云万治一年二月十日晴牛込ノ和泉橋ヲ入舟
入堀普請相出陸奥ヲ以作ル伝ヘ立図ヲ奉ル

○永享記云神田之牛頭天王渕寄大明神ハ安房渕
寄明神ト一體ニテ武列神奈川品川江戸河ヲ此
神ヲ祀奉ル或人云平親王将門ヲ神田明神ト奉崇
トカヤ

○林道春丙辰紀行ニ云　神田

此社ハ平親王ノ屍骸ヲうばみ〻而モ其霊ヲ
まつるとかゝりつたへ侍ル

昔聞鉄額是宝尤ト何ぞ将門(マサカド)迴(ス)逆謀(ラ)草
木山川無寸土一雄埋骨幾春秋

暮景集　太田持資集

深夜帰雁を聞こと　神田の社にて
詠る所

鳴つれて秋より来る雁の声　男の心なるべきものを

小弟云代記云れ　おほすり　雨乞　神おろす　毎年祈祭あり　大和田　大宮の祭りといふ　是也

東大寺を造立し給し　金銅十丈の大仏と安置
し給ふ基　薩と菩師　婆羅門　供養をうけられ　供仏
施僧の儀　古跡　来る　於　毎年二月　宮かめら
祭の儀　宝殿の儀　あつまりくるなり　此儀　神
つとむる　故　なり　東に　四　おれ　とて　神
を　西つる　天満　右神　西　を　麻績　右神　と　なり　天
神　の　祭あり　記　神の　祭　江戸　神
田明神　に　祭り　れ　神田　明神　の　儀
記　宝記　祭　祭　する　此　神　あ　する　此　神

の時天の石戸のかなたに八百万神あつまり給ひて神示
かけとりこの方ことまれりせよ[illegible]法
式三番といふ[illegible]天照大神千家唐[illegible]
[illegible]大原神三番申祝久八位[illegible]大原神[illegible]
[illegible]神代のまつりの日[illegible]氏子[illegible]
[illegible]他の[illegible]軍[illegible]毎年九月[illegible]
神[illegible]神[illegible]
[illegible]大永[illegible]申の[illegible]
[illegible]氏[illegible]

神沼のかつをより申の年の神事始めて次年より
神[illegible]例[illegible]氏[illegible]
一年へだて二年目ごとに神[illegible]年中
[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]

○垂加草巻二　神田明神

靈祠元是進雄尊　土俗妄傳称將門勾賊破家
惟此事神宮何不解誣究

寛明事跡録巻第三

寛永丙寅三歳十一月之内

十日自京都公家衆下向是去頃行幸ノ夏并元
異儀軍家御帰城ノ夏并御臺所御逝去等
之儀ニ付テ也依テ公家衆一人ニ大名二人三人被仰
付御饗應有之

私云此時烏丸権大納言光廣卿下向之序
ヲ以テ神田明神ノ前被通給ケルニ鳥居之
神サヒテケルヲ問ヒ給フニ神田明神ノ社ト答
則参詣有テ神主ヲ被召明神ノ縁起ヲ被尋ケ
ルニ神主畏テ本迹縁起ノ神道儀ハ於神前演
説致事憚少カラズ然ル御尋ノ旨ヲ不申モ
心外ニ候ヘハ大概ヲ申シ抑此明神ハ平親王
将門ヲ祝タリ其故ハ往昔朱雀院ノ御宇
天平二年壬辰二月廿四日平将軍真成ト戦
俵藤太藤原秀郷ガ為ニ被誅其首三月
九日京着シケルニ将門ノ髑首ヲ追テ常陸国ヲ
発シケルカ武州豊島郡ニ到テ彼髑髏伏スニ

其所妖怪有テ郷民ヲ惱事不斜是將門ノ瑳霊ノ
宗也ト云ニヨリ同年九月十五日社ヲ立テ奉祝瞬明
神ト其故ハ將門為秀郷自矛嚙左ノ眼ニ射貫一
目也因ヲ瞬ノ字ヲ加ヘシ也瞬ハ訓無二目瞬ヲ片目
ト讀因テ俗ニカンメト云習リ是將門ハ朝敵ニシテモ命
シ給ヘハ神ニ祝シテモ勅勘ノ神ナレバ七百餘年ノ間
閉帳ナシ又瞬ノ義理ニヤ氏子多ト云ヘ共皆片目ノ
心ニテ大小有カ何様眼ニ左右ノ替アリ當時祝奉
シ時猿樂ヒ集テ能ヲ事テ神威ヲ統ム是ヨリ毎
年九月十日神事ノ能ヲ仕ル然ニ大永四年北条左
京大夫氏綱大軍ヲ以テ武州江戸城主上杉朝
興ヲ討滅シ武州ヲ治故ニ軍事ニ故障シテ今ノ
年ノ祭礼并能ノ事ナシ明年執行是ヲ北条家ノ
例トシテ中一年ヲ隔神事ヲ執行ヲ今ニ至リ社内ニハ牛頭
天王ヲモ奉祝是レ房州洲崎ノ大明神ヲ勧請仕
此神ハ天照大神ノ御弟素盞烏尊ト申傳リ
此神童兒ノ御時ハ牛頭天王ト申又茂荅天神ト
モ申ケル光廣御熟々聞給ヒ勅勘ノ事ヤ、久シ

キ事ヲカシ今ハ神ト奉崇上ハ其憚有ヘカラズ然ルニ奏聞ノ致シ勅免ヲ蒙開帳ノ事執持ベシト有シカ頃ヲ光廣卿歸京ノ後今年十二月勅免アリシカハ初テ今年開帳ス自業平二年至寛永三年七百餘年也

○小野照崎明神

六誹園立路隨筆云小野照崎明神江戸坂本ニ有リ此神名照崎ト云盗賊ニテ上野ニ住テ往來ノ妨トナル故ニ召トラレ此坂本ニ於テ刑セラル其枕心人ヲ悩セ侵ク神ホ祝ヒ也今祭礼有リ

王子金輪寺

○田樂躍　毎年七月十三日

若一王子宮典樂躍

一番　中門口　腰作
二番　道行　同断
三番　行遣　同断
四番　背摺

五番　中居　同断
六番　三柏子　同断
七番　黙禮　同新
八番　捻三度
九番　中立　腰筰
十番　搗筰　同断
十一番　筰流
十二番　子魔帰

以上　七月

○右の番組赤井浮水の書かり祭礼のさびこたに拝殿ゑ押て新たに写たるなを用る事ありしかしかるに神子中も浮りて典薬踊と

○黄葉集　為九大納言　茅原光廣ら　云

上野東照宮の前の花を見て

時ありれを枝ハかりさりしかさかり神ゑ中ら冬の雪の花

○忍の森　協個家集　那須水　云　東叡山とハ

台徳院様の御時ゑ　権現様御宮其外堂塔

ひえの山をうつ〳〵中堂相東と接伝〳〵の文中の名り
○東相東又忍の号と云ふ也池水猶の海を入るあり
こ池の向をいふの森と云ふ手伝る也森と名ハ多
の大名方の九秋の地なる那須氏ハ延宝天和の比の人也

○上野元三大師堂　石井あり銘ニ云

謹東叡閑山廟前鑿一井擬進孝善縁天漢水
潔表仏心清淨徳法雲灌頂令不断妙法嘗保年
辛酉十月二日弟子晃海

○東叡山號

享禄以来年代記云元亀三壬申正月二十日信玄欲身
延山為東叡山而不成

○重修武刕先聖殿記　鵞峰文集ニ出

櫻峯　今之山王山ノ事ニ

○迴國雜記　聖護院道興准后

文明十八年十月ノ記

次の日清水をうて郭泊ニ入る所ハ山きはにて
ほすゝ名所ともあつまる中に名の品ゝ入る所
く松原のなる所ハやさみく

高サ五寸ばかりにまるく作りて
○秋山首雲霊神　薄草山谷寺町本性寺にあり
俗記に〜秋山首雲霊八幡は摂津国川辺郡山崎の
産にして吳国満仲の臣義尓仲光の商牧百氏なり文
を宗像と云ふ子孫繁昌あづまよりは江戸新川の商
家岡田孫兵衛と云者小法ふうまれつき白毫ありく
より家をつとめられたるの家をつがせ名を岡田
孫兵衛と云ふ小法華と信仰隔年日蓮宗
なり〜なるか三十八年の比より疫病とうれて
疫病ばかりあり四年の度り
ある医師の云く是疫病なり病と治なんとすれば難つれ
用ゆる薬是悪有る仕事也と見う後二年必死
と朝廷にて病苦きまりて来てきあり
永れ死すべきれば法の仏神なりいて死後疫と言ふ
多人を必死ん後必疑ありてつゐに葬式元年甲
子秋九月廿一日まりぬ別世家小藤り秋山首雲と名後
何り疫と若り三年こゆるとひかく見えるとの事二
月〜て平家にまり世人あまり○く信じく疫神とい

預りし時潔白あらんとぞ云

○高尾墓　山谷寺町　春屋院内有り

浅草

○さは勝仏ちかめてあつまたいきたる道の記る云

あさくさに観音てゆ出まうでうてもてなす仏

おもひたちはまをせうこ

いうあれやれるとまかりうちさそもしをもるのうみ

○林道春西辰紀行に云

清水

寛永寺切りこしたる観音堂　また堂　人の多く参詣

ひとりたる　大士の日人なさいれ　集てまうり給ひ

人のつかやうに男女の群集する市のたちまちに

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]ハ牛鬼の出くはすると云
[illegible]石碑あり[illegible]馬にて大士の化現なし
[illegible]て牛ハ出ることなし[illegible]観音院有る
人[illegible]を忘れてやそかへりぬ
法威能救衆生憂小白華山彼岸舟若地馬郎令渡
水應同海底有泥牛

○朝野雑記（篠崎辛維章）云浅草観音堂者所祀猿田
彦命也見東武府志

○小田原記云大永二年九月ノ初古河ノ御方ヘ御使
アリ御使者ハ冨永三郎左衛門尉トソ聞ヘシ其帰サニ
冨永武蔵ノ浅草ヘ参詣シケルニ其日観音ノ縁日ニテ
十八日ノ夜ナルニ常ヨリ人群集ス殊更不思議ナルアリ
弁才天ノ堂ノ邊ヨリ銭涌出ル事有リ寺僧共制シケル
モ参詣ノ人是ヲ不用多ク此銭ヲ取冨永モキ井ノ思ヒ成
シ故リ参リテ後此夜ヲ言上ス氏綱ヲ初メ奉リ諸人ヲモ
ト云処ニ運乗伏被参ケレハ家元面々此由ヲ語リ給
ハ法印語リ申ケルハ彼浅草寺ハ仁王廿四代推古天皇

ノ御時定居二千年建立也本尊ハ聖觀音関東最初
ノ伽藍灵驗先双ノ処也 種々ノ旧説不思議ノ旧記
載不可勝計彼御本尊生身ノ薩埵ニテ水中ヨリ浮
出サセ給ケル

○多賀谷記云 永亨十一年結城戦場之時 打軍義教爲きゆい上杉中務
少輔安房ノ御舘并御書故書を以て東山道東海道の
軍勢十万餘騎御帰京ノ御前ニ参ル 陸と清ル軍評定
しられる

日本國武州豊嶋郡于東郷金龍山浅草寺
洪鐘銘并序
天鐘者震梵苑之枯禪祭驚壇之深省
者矣南閻浮提各以音聲長爲弘事西
郡勝地持刑榛荃翻北道場於是傳法
聊持短既勸殼善縁新鑄鳧乳之撞永
扣竜潭之月耳根契證者速 翅解脱之
門庭眼裏聞聲者即獲圓通之妙果當

時若不記者後代誰得識哉銘 ㊀

未鑄成前　響隔九㊁　新鑄成後　福應大千

規模脫出　當空高懸　輕輕撞看　隨仏事邊

至德二年丁卯五月初三日

大勸進僧都海響

小勸進大和國道高

鑄工　泉守經宏

○東鑑卷十二云建久三年壬子九月八日己卯法皇四十九日御仏事於南御堂被修之有百僧供早旦各群集布施口別白布三段袋米一也上計允行政前右宗進仲

業奉行之云云僧衆

鶴岳二十口　六所宮二口　伊豆山十八口　箱根山十八口

大山寺二口　觀音寺三口　勝長寿院十三口　高麗寺三口

岩殿寺二口　大倉觀音堂一口　窟堂一口

慈光寺十口　眞慈悲寺三口　淺草寺三口

弓削寺二口　国分寺三口也

同書云治承五年五月十三日鶴岡宮宮殿化事アリ大六武蔵淺草寺御目ト云者也

○萬葉緯卷十九　洛東医士編　輝

種李云或曰淺艸寺縁起推古天皇定居一年一

永享記云城東浅草寺ハ推古天皇御宇定居
二年戊子建立セリ佛法最初ノ霊場ニシテ
関東無双霊験掲焉ノ観音ナリ

○浅草観音堂繪馬考

元文ノ初黒沢左ヱ助安信定紀伊勢平蔵平貞丈
語テ云ヲ祖父定幸相模鑁夏驪黄物色図編集ノトキ狩野
主馬尚信図ヲ繪昏ス此時馬ニ骨相毛色等ノ品漫
尚信始テ画馬ノ精妙テ覚ヘ歓喜ノアマリ馬ヲ画キ
浅草観音堂ノ繪馬トス今俗狩野古法眼元信ト云ヒ
或ハ画馬夜桜ヲハナン草ヲ喰シナト妄談ス也此繪馬ノ
存スト云　生之助定紀ハ処々有テ元文三年戊午九月廿七日
重追放ス　仰付家断絶ス

世寄云
黒沢左助定幸
初名長六郎
覚文元年辛亥
三月朔日没
法名聯翠院
禅山初峯屋
葬下市谷御
長延寺洞家
定幸家ハ
玄孫左助名
アリテ元文三年
戊午九月廿七日
重追放ス仰付
家断絶ス

寄ナ此繪馬于今アリ縁ニ寛永十九壬午年

二月十九日 観音堂炎上シ時武州住木村市兵衛
出之トアリトム
瀬名貞雄云今ハ文字ウスク ナリテ下ヨリハシカト不
見尚信ハ慶長八年癸卯ニ生ル慶安二年巳丑三月
四日四十七歳ニテ卒ス寛永十九年ハ尚信四十歳
ナリ存在ノ者ノ画ナレ馬ノ筆精ヲ賞美シテ
炎上ノ時モ此画ヲ取出シ出シタル者ノ名ヲモ記テ賞
美スル旨再板江戸砂子狩野玉樂カ画ナルヘシ
○云ヘトモ黒沢定記祖父ノ時ノ事ヲ談スレハ最テ正

トスヘキ歟多賀三右衛門高補ノ家系寛永
十九年壬午二月十九日浅草観音堂炎上帝御宮院
番池田帯刀組多賀外記常勝高補ノ御花畑番今御
高祖父ノ御花畑番
松平右京門大夫組戸田半十郎御使ヲ勤メトアリ
○滑稽太平記云天明三年(明暦三年)月廿四日ノ記ヨリ駒形ヨリ舟ニ乗テ各ハ上リ観音
堂ヲ拝ムル門前ノ二丁此辺ハ海ニ成シ世ツクリ
ヤウ〳〵ヤウヤウ此辺ハ群集ヲ成シ四方ヨリ海ノ如キ海ノ如
彩ヲ成シ高ク高ク流ル清水ヲ流シテ流ル音美ナルヨリ
或人ノ云門ヲ出ル者ヤ

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]

本堂の額

元和癸亥歳孟春穀旦書

観

音

堂

大明福建漳郡龍邑徐紹勲立

天井の龍の画

将野右京進安信画之

二丈巾広

洞房語園云

昔陽明海棠花門二丈巾広とゝ[illegible]

大樹公梅園院殿ヶ浜御遊覧ヶ浜の名ハ二上の浦ヶ浜の名の付　東陳菴

又云浦々の名所の浦園より往ゝ[illegible]と称して[illegible]
るのうらゝあい[illegible]の[illegible]
ちくしの[illegible]
本の下[illegible]
あるうらと
[illegible]千本[illegible]
て[illegible]
のれと[illegible]

又云自性院ヶ浜の[illegible]

本堂のひしろ沼者の[illegible]して[illegible]
中ゝ

蓋當山堂舍鴛瓦既落彩様幾朽故私勵修
営之微志廣募遐迩之貴賤自享保四年己
亥五月興土木之功至享保六年辛丑九月
成爲因建供養塔而十方人結社簿施主檀越
姓名及其本末之紀事悉藏其中以傳不朽經
曰云ハ前後讃文偈之
于時享保六年辛丑之冬十一月

然谷寺九宝つ稲荷乃社つ西〳〵たの宝篋印塔基
あつ〻其文ハいと〳〵

経石之券縁

當山寺務僧正公然謹誌

當社稲荷之神也者昔疇在於北越施於威灵之
灵聰也茲予寛文年中有所以而遷事此地矣于
時欲念神力之增益自于拾拾小石毎石三礼珍
敬之而大乗妙典全部書寫之而以奉納壇下之
土中已竟石芒其體雖非可壞歟入瓶器而表其
清淨耳今茲亦近以書写同經毎石練密首題唱満
成立一基志願充足之訖伏乞神力増進利益无
窮乍恐天下泰平四家安全旦信仰諸人二世大
願成就圓満願以此功德普及於一切我等與衆
生皆共成佛道之意趣如左

山本氏
一中日頼

宵宝永二乙酉暦臘月十六日

碑ノ右ニ

実相之如月ハ流生毛ものゝ
ものゝ果ハ[illegible]

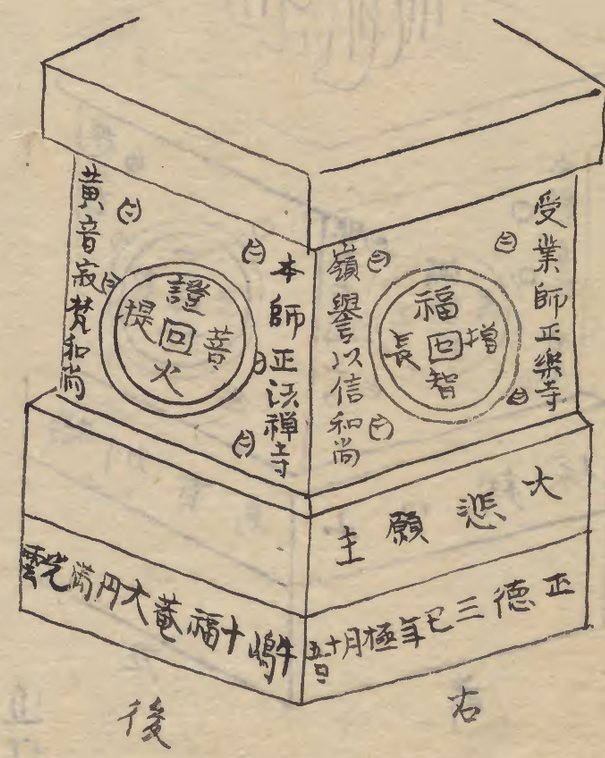
研ノ左

一墓造立之願主河部氏正羽

浅草寺奥山ヨ摂州有馬山口銭塚ト云フ石碑ノ上ノ方ニ地蔵ノ像ヲ刻ム首ハ破損シテ體ノミ立テリ其下四面ヨ陰ノ方ニ彫刻ノ文ク

近代補有リ

士不勤而緣家人災也
況無字而得我何或遂
命間坎後二子皆出身就
職



○按江戸砂子に浅塚弁天あり女の石と有りこれまりて
ちの名ありるや又山門の東の方老女流天をも祭祀弁天と云由

○迴國雜記 聖護院道興准后
文明八年十月記
陸奥とゝる所にとゝろく彦のこれる墓をたゝく
冬の月ハまこと陸奥ぬけうの松原をたゝく
北星はたゝりに石ばかりなる所き所る石ありこの石を
尋けまに中ほどにはやみなんなさけふくいたりしかと
一人のいはき容易大きうの常やうにうれちの世もまと
拾ひあつめてみちゆくなる出しらいの石の位をうつ
て文字のあるをとゝのとゝ行りなりて拾ひ

あまいはらとさくふひくらはれ父母松のわうまうまりて女
神ありける男のこうべをうちてはて衣裳の下のもと
にて一生をとをりはらきさうにうのむすめはやくて
ひろまりはあさ田しやいくほもあきうの中ようは
うまのまぎをして父母おろつをに西極楽へ永劫流転ん
ことをおそれさえ入ぬるあきそいはんもまたしたまうの
るれ〳〵まして西陸はれ父母をとりぬまして入ひとり
ありはたまくへありしをうに男のおくにおうてうれえ
まりはたものまくにはうをうをうをうを

いとをものをうをうんとそもきうまうがきあぬとあまく
みまいへひとりやあやくをうをひをくをうれを和しをを
也心をかまをまをひくはさあをまをふりはをまをりを
父母をまをあをうれをはをくをくをあをの要業と懇悔懺悔て
仏娘の菩提をも弔くとむひはるをはをくを
ら古老のうかれを

つこをのつをるまをあきをはをさををるのをきををひをるん
南西の方歸法華をとくるを千手観音ををはりたをひを
き霊仏をまをしをるをはん

象潟の岸ちかく名所多くありける中にも又ちかき所にも
塩越て
いそなれぬあのあまもなからぬ東海の事かちあふ事なくは
まちれてもつみかのみちぬ岸つら山前をとをくいづくとも
あまちか末に見る所にて
命さへまてさるしき夕まくれ渚岸の声とあつて
あさひ川よいよりてなある
うき旅のなにあつて寄ひ川浪の神やかけみなうく
色かり温海川へ趣く又中川未洋

蛛綱草牽集　那須　若水　延宝九年
云七月にめつらしきの事と
まや信土山の高町は漆草の観音堂のうしろ
の麓まては間口五十間観音の前は間口百間の
上ある所の間口は今も石壇につき瀬は一丈を此
日か本の家ありけし故は同じく人を移す似く
けれとも此後家つくるよしなきに寄しく又物する
所の土は面くよりたひ指まての事あきもいつましくて
三枝とくさて今そこらめく寄あまくいはりもりしはすは
とおくても拾とらしよ今は拾もやと見ゆいはいはばふはり
めそくいふ人あれとも事はまことしめされましいかさ
かしく面いひはらんかちのちくいぶりあらんとつぶ

武蔵之州浅草之川遠出乎源近乎海大悲薩埵現
像垂跡埵ヒ如在昭ヒ而著其為霊場亦已尚矣然
恣事釣漁夭傷水族冤若之慘不勝哀愍腥臭之穢
固可厭惡伏惟霊利數羅田録蓋以大悲為此所不
安也幸遇今時不　洪運仁慧四海深重物命礼崇
三宝勞興寺宇於是去歳圓寺堂舎修治補葺猶如
新成因立制令厳戒殺生乃以南自訛詰町北聖天
岸十町餘計為界鳴嘩盛乎好生之太德種福之生

業一在乎斯人主天恩意足仰而望菩薩之觀心可
從而知區々愚哀仰有餘乃爲銘曰

維斯一心　即具三千　以我則非　以觀則圓
鱗介異類　好悪同然　詎忍殘殺　不知哀憐
営生嗜味　速禍取愆　畏報於後　思戒於前
艾明遇時　慈悲如天　網罟作禁
魚鼈無處　豈但物命　因茲得人

元禄六歳次照陽作噩春三月武州豊島郡金龍
山浅草寺住持權僧正宣存撰

廻國雑記　聖護院道興准后

文明十八年十月記
島越の里といふ所にて

[illegible]

此音清水とぞ[illegible]
[illegible]紙の里とつき芝の御[illegible]

○照高院殿家集　道晃

寛文五年[illegible]月[illegible]日
[illegible]御門跡上洛の時隅田川於本母寺
[illegible]大沢[illegible]大[illegible]仏寺三御涙
[illegible]

隅田川のほとりにて　道晃

[illegible]

あたらしかりしをうんたんたるかの手の舟流水　道寛

○六地蔵石塔

清水雷門ノ東ノ六地蔵の石燈籠あり年号見へさうだ

十月廿二日　鎌田兵衛　こゝに文字のかゝる人歟

○夫木集

康元元年鹿島社ノ法ノ水まさこ川のこゝろはとこしなへ

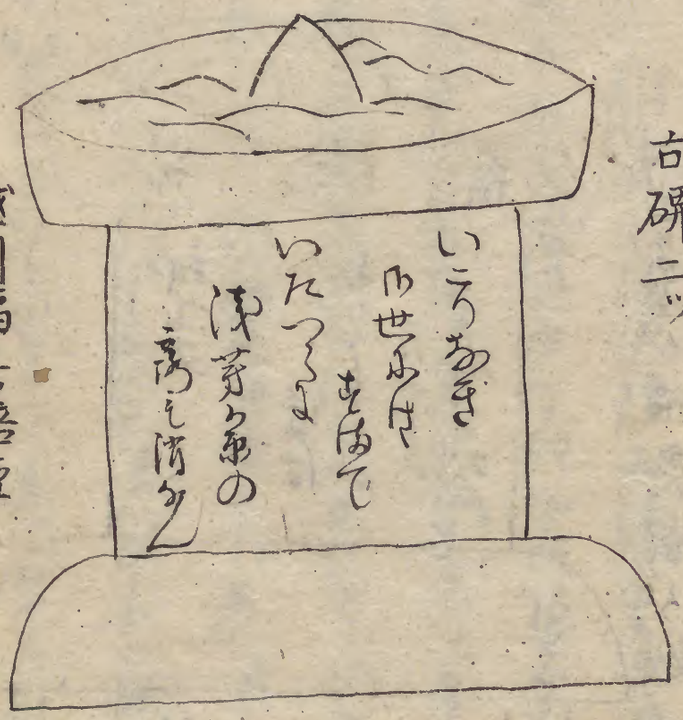
かのとらのかはらのちとせをかけてたれか

すゝこ川もりいきすゝ国おそハ身をうきたちのあるせうり

光俊朝臣

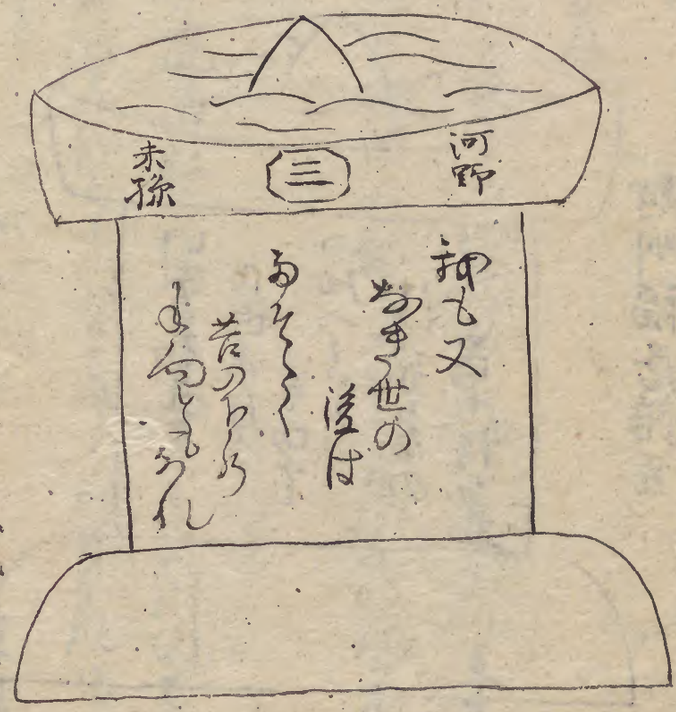
橋場總泉寺大門ノ入り

古碑二ツ



越州福居陪臣

河田入道常観



河田道流り娘良鐵り母

○浅池

朝房浅間　山田其ノ浅池詳云深芽り東院池のうち
二日菴ノ海り方丈の道戸ノ左ノ方ノ小池ノ
にて孔雀牡丹多の蓋有り人仕年の比者亦
ゆかつとも花ノ多れ高貴ともいと尾暁ノ
作ノ水鳥ノ鳴ノ如しい花さけ
て世の勤多りからかいて跡ノ
時作ノ水鳥ノ鳴ノ如ノ
度ノ作ノ里ノ人と世人ノ

をも寄りて後に果ぬ君又年比庵ぬ如何にも花かつらさい
つ浅るに産まて果しりしに物忍所し許りあらせら君住と歳
螢を挿て及伸し名印男蓮乃池かくて随縁し君蓮乃池
八幡の如年の前に妙香尼蓮を悦ひ其を得て池や里の後り
備へまく園百茶にたち如花容かが称を伝りて花むかのかくし
なれと称を挿の苑を刈捨池中に弁天の小社を建て今年妙香
尼法尼の古像の施主として一宇の堂を造立し後の文殊に古碑
蓮を残し其後ニ古道再興の為施主を法也男　明暦戊戌七月
古七ゟ古寺の跡を寄として設立の所の上又西西し正宗にして

永く眠る男云く
享保庚子三月五日山田某乙蓮華乃弟碩僧庵にて
蓮乃池辞を求むる男道仲乃歌る者にて寛永年中の紀
云ふり名をあけしかの之男享保何れの年にか妙香尼堂
の法名を以て記蓮の由因を見しにたり傍乃都―

○中田
山岡俊明後號此しも也津子馬逸するの名まとろふ
寺町百庵と名之智ミむかし八年く
元無化乃ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世のさうしとかいかはしもの[illegible]

○橋場　梅花無盡蔵傳　万里巻云江上春望詩後ノ注隅田在武蔵下総両国之間路傍小塚有耕道灌公為攻下

総之千葉樓構長橋三條其所号橋場

○石濱　同書云武州浅草石濱城主号寿田御所譜成高

小田原記云小田原ノ方武州石濱城主千葉次郎殿黄色陣物（天正元年月比）

織ヲ着テ一番ニカヽリ関宿城ノ方ノ物頭菊間図書ト云者ノ

落千葉爰ニテ死ス　此時石濱ノ千葉殿女ナリテ

男子ナシ氏政御下知ニテ北条常陸守氏繁ノ三男ヲ

養子ニシテ彼息女ニ合セ千葉ノ一跡相續アリ然ル先

千葉二郎幼女ナレハトテ方ノ侍光石濱ノ城ヲ木内上野

預ケラル、上野討死ノ後ハ子息木内宮内少輔支配アリ
彼ヲカ畏ハ枝橋肥後守板橋城主桜戸越前守赤塚
城主犬塚等也以上石濱領ハ四千貫ノ所也然ニ千葉
二郎成人ノ間石濱ヲ返シ給ハレキト度々申上ラル、木内
カ家老宇月内蔵助ト申者申上ル宮内少輔モ已ニ石濱
居住ノ後父ハ討死其後数ノ高名軍忠不勝計石濱ノ
御改易アリカタキ変ナレハ頻リニ申ス間此度延引シ
ケル間千葉二郎ノ内ニ須藤上云者主ノ所望ムナキ変
ヲ無念ニ思ヒテ石濱ハ忍ヒテ行宇月キ云者ヲナラヒテ

ルカ石濱ノ摠泉寺ト云寺ノ中ニテ行會サシテカ
テ死ニケル此ヨリ小田原ノ間十葉二郎ノ所行也ト
本領ヲハ終ニ返サレス

○新安手筒云安藩伯書石濱ハ今浅草観音堂ノ北金龍山石
濱ノ遺地ノ事ナリ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○法源寺ノ碑ハ石濱[illegible]ノ碑ノ裏ニ保元寺[illegible]

○大なりとして五輪の塔有齋後別当実盛の墓といふ傳
此塔とおなじ伝ふるよし

裏

大同元丙戌三月十日入寂
春秋七十九歳
大僧都智海法印
砂尾石濱道場開基初祖

由緒宝亀元庚寅
戴向四面建立堂
延暦三甲子秋村里人氏
寺砂尾石濱號道
手ヲ海護誌

古有如斯石碑
元禄八乙亥百日
五月雨夜開山
瑞夢相承計
法響元泰

○碑のうつの文字これハ元亀八年ニ立てしるし

仁壽三年癸酉三月十〇日　そも後ふるてしるや

齊衡元甲元年
大僧祁真海法印
四月十〇

そも後ふるてしるや

昌泰二
康元二暦丁巳
再興法響上人代

見ハ古くさん面

光明遍照
十方世界
念仏衆生　文永九
摂取不捨

これのこそのちのちのこそ

○大野修理亮子孫十郎人質ニ〜て有〜る又後記
亮殿〜まゝ沖ナ命海ニ海福寺ニて切腹ニ付し
ゆゑ御石負旗ゝの石碑ゆゑ尋ねて見るもの〜ふ
ゑを置り石碑ゆ〜ゆゑ過去帳ニ記〜有るゝて参詣
のこと也〜

元和元年ニ月十七日

華岳玄芳禅定門

大坂大野修理亮子息大野沖ナ命人質生年十五歳

千住

○羅山詩集　林道春　巻五

過千手河橋　入間河流下為千手川又流為浅草川自千手僅一里行

○日暮里訪訪臺八景　享保八年癸丑国子祭酒林信充の詩を写し畧之

筑波茂陰　黒髪晴雪　前畦落雁　後岳夜鹿

隅田秋月　利根飯忙　暮荘烟雨　神祠老杉

○道灌石碑　日暮里本行寺ニ有寛延三年庚午主僧

日忠懸河氏　太田備後守臣古屋孝長四宮成煥と図り碑

をゝて筑波山ニ入石正橋字仲綱文作りて心情りくゝ碑

半截リて文字半ばるせり

○駒込富士ノ碑有坂ノ上リ口右方梵字有リ延久三年十月廿八日トアリ

○下田畑村八幡ニ右の金剛神有古貌甚し

施主道如宗海上人東岳寺賢盛代寛永六己巳年月廿日トアリ

○大覚山清心寺法光明宗大学山三学頭本堂清心寺三大字ノ額

赤陳墨書ト有印ニ赤林ト有至テ大キ形ノ額あり

○於七墓

白山指谷　圓常寺ノあり墓ニ

妙榮禅定尼天和三癸亥年二月吉日行年十六歳

此碑山ヲ出て墓石ヲ寺ノ方ニ立て門内ニ別ニ石塔ヲ墓ト云フ碑ヲ立てり

○弘安年中の碑　小石川三百坂　光圓寺ニアリ近比堀出セリ

青石ニ梵字有テ下ニ弘安十年丁亥七月日トアリ

○白山御殿跡

近藤義休隨筆ニ云白山御殿ハ元館林ノ御屋敷ノ

ヲ元禄年中白山御殿ヲたてさせられ御矢倉大手

門ハ寄合衆五七千石の元屋敷ハ大手御門ハ

坂ハ御ノ方ノ九坂幅ハ張ノ石ノ四方ニ有リ坂

の内ニ清水ノ滝布ありて石垣より高ク流れ

ありて

大ハ薩摩守の出ス所ノ清水ハ清ノ水ニて

春日社領内に水門明神のまします社あり
堀越殿内に南北朝殿番五人[illegible]
のこりの[illegible]
[illegible]
平家西海の時[illegible]
[illegible]
又四天王寺[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
○根津

江戸圖鑑 石川流宣 改之 元錄二ヶ年己巳の板こし

云不寢權現 千駄木仮

身延の尼の記 信元改

谷中の[illegible]寺といふ寺中に[illegible]大[illegible]寺の[illegible]
[illegible]
つゝみ[illegible]の沼のほとり序

私が多吹云もうしゝ[illegible]のうれめい花弟と云弟まをし
世ゐくいよ[illegible]
附りあゝ世[illegible]
こゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
ちや宿の[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふかきばかりきてすらつまて枕女之へし
ゆくてこしかるとけかさの肩くまて君か依てなれぬ なれきき
とかんよこしとあり
私加多比五巻本ニ万治二己亥年季秋吉日と有り
○懐こあし栗云
遊大音寺　キ角
梅ちるや乞食の家ものそかるゝ

妻恋

○兵家茶話ニ云武江妻恋岡ハ信田小太郎小山判官を
殺し給ふ所と云伝ふ小春ニ稲荷の旅社中小山判官の
霊祠有り又妻恋の傍ニ酒井雅楽頭屋敷 今ハ酒井氏屋敷となる 茂林
の樹ある所の旅の所ニ小山判官女の塚あり竹薮
残りて元禄の比迄ハ有しか今ハ崩して今ハ無くなり
伝へし
或ハ信田小太郎の旅亡ハ相馬の系図を考るに将門の
子小次郎将国ノ子小太郎文国常州信田ニ住せる故信太
小太郎と云ふ子も信田ニ居し小太郎と云て昔
此も小山判官女ニ嫁し給ひしハ一旦繁昌して其後年来に

[illegible]

○新橋　寛文六年画図ニ勧進稿とあり

○本郷ノ城

小田原記云岩付ノ家三三人武者大将アリ一人ハ三戸駿河守一人ハ太田下野守トテ武州本郷城主一人ハ太田新六入道無安トテ此三人道譽ノ下三千余騎ノ軍兵ヲ三ツ三分三百ツヽ預リ一方大将成テ道譽ノ名代ニ方々ヘ働人々也

○戸田渡

小田原記云岩付太田源五郎後三大和守ト云武州戸田渡ノ上長瀬ト云所ニテ討死アリ略下

千壽大橋

千住の大橋ハ文禄三年甲午伊奈備前守掛ル

ゆゑ寺一寺四石地ハ権現別當圓藏院書留ありり

日本政府図書
富岡文庫
江戸四日市 古今珍書倶楽部

国立公文書館
National Archives of Japan